

春はるをを探たづねる

戴たい

益えき

尽じん日じつ春はるをを尋たづねねて春はるをを見みず

杖じょう藜れい踏とう破はす幾いく重ちゆうの雲くも

帰き来らい試しみ梅ばい梢しやうをを把とりて看みれば

春はるは枝し頭とうにに在ある已すでに十じゅう分ぶん

【作者】

戴益 (生没年不詳) 作者は宋の時代(九六〇〜一二七五)の人というだけで生卒年その他不詳。この一首によつて名が伝えられている。

【語釈】

* 盡 日…朝から晩まで 終日 * 杖 藜…あかざの杖をつくこと

【通釈】

一日中、春を探ね歩いたが春らしい風景を見る事ができない。杖をつき山野(さんや)の雲を踏みわけたが徒労におわった。家に帰って何気なしに梅の枝をとつてみると、いつのまにか蕾もふくらみ春の訪れをみせている。